

学生提案成果報告⑥

FAN×FUN OHYA ～グリーンツーリズムで大谷にファンを～

宇都宮共和大学シティアイフ学部 2 年 松山晃廣(ふなやまあきひろ)
岡田萌那・小林勇貴・須藤新大・田中悠太郎・梅井龍希・ツウシンバータル＝ブルガナー＝長嶋侑奈

【概要】

宇都宮共和大学シティアイフ学部 2 年の渡邊ゼミは、令和 2 年度の活動として、宇都宮市随一の観光地であり、大谷石の採掘で知られる大谷地区における新たな観光資源の開発に取り組んだ。大谷地区では、大谷石の採掘業に関連した観光資源はよく知られているものの、それ以外の観光資源は開発途上である。また、近年、地方創生の潮流の下、住民でも観光客でもないいわば地域と深いかかわりをもつ「ファン」を生み出すことで、地域を活性化させる方策に注目が集まっている。このような背景のもと、本研究では、大谷地区に広がる農的資源に着目し、その農産物や農家ならではの食や文化を生かしたグリーンツーリズムの開発に取り組んだ。その果実として、2020 年 12 月 3 日に本学留学生を対象に、モデルツアーを企画・実行した。その結果、大谷地区の農産物や半田氏に対する留学生の興味関心が増大し、大谷の新たなファンを生み出す成果を得ることができた。

1. 企画の経緯

宇都宮共和大学(以下、「本学」という)シティアイフ学部 2 年渡邊ゼミは、観光学を学ぶ学生が集うゼミである。本学では、学生が地域と協力し、実践的に地域の課題を解決することを目指したゼミ活動が活発に展開されている。しかし渡邊ゼミは、具体的な連携地域やパートナーとなる方がいない状況であった。一方で、本学のほかのゼミは、2018 年度から大谷地区において、草刈りや観光活性化のためのイベントなどを地域と協力して開催していた。また、2020 年度に大谷グリーンツーリズム推進協議会が設立され、大谷地区でのグリーン・ツーリズム振興に取り組むこととなった際に、推進協議会から本学に研究等の面での協力の打診があった。さらに、指導教員である渡邊は、大谷地区を含む宇都宮市北西部の農村での観光振興に関する研究経験を有していた。このような背景のもと、渡邊ゼミは、大谷地区でのグリーンツーリズムによる観光振興に取り組むこととなった。

2. 企画立案の経緯

(1) 準備期 (4～6 月)

令和 2 年度は、新型コロナウイルスの感染拡大により、本学では年度当初のゼミの実施がオンライン上に限られていたため、ゼミの方針をはじめとする議論は進まなかった。5 月下旬に対面授業が再開し、学生個々のゼミに対する期待や取り組みたいことを指導教員が学生に個別にヒアリングした結果、地域での実践的な活動に興味を持つ学生が多かった。そのため、指導教員から大谷地区でのグリーンツーリズム振興に実践的に取り組み、年度後半にはモデルツアーとして結果を報告する方針が示された。これを受け、学生は大谷地区に関する知識がほとんどないことを課題ととらえ、まず大谷地区を代表する産業である大谷石の採掘加工業に取り組み、大谷 KANEHON のカネホン探石場を 6 月 9 日に訪問した。ここでは、観光客の受け入れに関する知識がほぼないことを課題ととらえ、まず大谷地区を代表する産業である大谷石の採掘加工業に取り組み、大谷石製のインテリア小物やピザ窯などの製品の存在、また製品にならない大谷石の端材について知ることとなった。この次に課題となったのは、グリーンツーリズムの基盤となる大谷地区の農業について知ることであった。まず、日本や宇都宮市の農業の特徴や課題についてゼミ生が各自調べ発表した。また、全国のグリーンツーリズムの先進地の事例を知り、収穫体験や修学旅行の受入に主眼がおかれていることを知った。そのうえで、文獻からはわからない大谷地区の農業について詳しく知るためには、現場を視察することが必要という議論に至った。

(2) ツアー形成期 (7～11 月)

上記の学生の考えを受け、指導教員は、大谷グリーン・ツーリズム推進協議会に参加している半田農園の半田貴也氏にゼミ活動を受け入れるためのパートナーとして協力を依頼した。幸運なことに、半田氏は過去に別の大学のゼミ活動を引き受けた経験を有しており、また農業と観光との融合に強いご関心をお持ちであったこともあり、ご快諾いただいた。7 月 7 日に、渡邊ゼミの学生 8 名は半田農園にて半田氏と初対面し、アスパラガス、サトイモ、シュンギク、タマネギ、長ネギ、ブロッコリーなどの畑作物を栽培していること、また農機具や出荷に使う道具、枠や白なごのつっかきなど、ツアーになりそうな魅力を見つけてほしいとの希望をかけた。観光客は何を楽しみたいと感じるかわからないので、ツアーになりそうな魅力を見つけてほしいとの希望をかけた。こうした半田氏の提案を受け、7 月 28 日から 12 月 2 日までゼミの時間や土曜日に週 1～2 回程度(計 12 回)、長靴と色とりどりのツナギを身に付けて半田農園に通い、農作業を体験しながら大谷ならではのツアーにふさわしい体験メニューを考案した(表 1)。また、この頃の活動を 10 月 11 日付の下野新聞で取り上げていただいた。

表 1 体験メニューの候補案(一部)

種類	体験メニュー案
食関係	もちつき、大谷石窯ピザ、流しそめん(近隣の竹を土台に使用)、竹の箸づくり、長ネギ焼きなど
生産・出荷関係	種蒔き、苗植え、苗植え(シュンギクなど)、収穫作業(イモ掘りなど)、選別作業(タマネギの重さ当てクイズ)など

3. モデルツアーの実施と評価

新型コロナウイルスの感染防止の観点から、不特定多数を呼ぶモデルツアーの実施は困難であったため、本学留学生 20 名を無料で招くツアーを 12 月 3 日に実施することになった。1) 留学生に日本の文化を感じてもらおうと、2) 大谷らしくするために大谷石の要素を取り入れることを条件とし、もちつき、句を迎えたシュンギクとブロッコリーの収穫体験、大谷石製のピザ窯で半田農園産の野菜を盛り込んだピザの試食などを、2 時間 30 分で行った(表 2・図 1)。留学生の反応は良く、教時間の滞在ながら半田氏と再度会って話したいという学生もいた。

表 2 モデルツアーの内容と行程

時刻	ツアー内容
10:00	バス到着 ① シュンギク収穫・もちつき体験 ② 大谷石窯で焼いたピザの試食 ③ ブロッコリー収穫体験 ④ 半田氏への質疑応答
12:30	バス出発



図 1 モデルツアーの様子 (筆者撮影)

学生に有益だったのは、ツアー実施までの段取り、ツアー実施前の近隣への挨拶の必要性などツアーを成り立たせるための「地ならし」の必要性を半田氏からご教示いただいたことである。例えば、ピザをご協力いただいた事業所におすそ分けするようなら心配りは教科書には書かれていないが、地域で物事をスムーズに進めるためには必要な行動である。それゆえ、ツアー本番までを終えると、物事をやり通すための「実践知」が得られた。

12 月 18 日には宇都宮市主催の「大学生によるまちづくり提案 2020」で本研究を発表し、優秀賞(第 3 位)を受賞した。市長からは今後、外国人観光客の受入にはもちつきのような体験型観光が重要とのご意見を直接頂戴し、審査委員からは他のツアーとの差別化が必要とご指摘をいただいた。また、会場で本ゼミ生が NHK 宇都宮局の取材を受けた。来年度は旅行商品化を目指して内容の拡充や改善を進め、地域に貢献してまいりたい。

【謝辞】

本研究の遂行に際しては、宇都宮市大谷町にある半田農園の半田貴也様をはじめ、大谷グリーン・ツーリズム推進協議会、大谷地区の住民・事業者の皆様から多大なるご支援を賜りました。また本研究には、栃木県令和 2 年度大学地域連携活動支援事業の補助の一部を使用しました。末筆ながら厚く御礼申し上げます。